

V 総合的なまとめ

調査結果をもとに、子どもの多様な生活実態、学習や生活に関する意識、保護者の教育や子どもに対する期待を明らかにしてきた。また、平成10年度から5年毎に行ってきた過去5回の調査結果と比較することによって、経年の変化を把握し、傾向を探った。それらの結果を総合的にまとめ、以下の4点に整理することとした。

1 子どもの家庭生活について

(1) 生活習慣

過去の調査を通して見ると、全体として、起床時間が早くなっている傾向にある。また、朝食については、8割以上の児童・生徒が食べている。朝食を食べない理由は「食べたくない」が増加している。夕食については、「家族全員で食べる」と「全員ではないが家族そろって食べる」とを合わせると、9割前後である。しかし、「家族全員で食べる」の割合を平成10年度と比較すると、小学校では8.4%増加している。新型コロナウイルスによって家族の時間が増えたことが考えられる。

(2) 家庭での過ごし方・休日の過ごし方

帰宅後の活動については、小学生は、「ゲーム機等でゲームをして過ごす」ことが6割強、中学生では、「家の休養」が7割弱であった。「ダンスをする」は、今回から新たに追加した項目で、小学生・中学生ともに1割程度であった。小学生・中学生ともに「マンガや本を読む」が大きく減少しており、「ゲーム機等でゲームをする」が増加している。

休日の過ごし方については保護者からの回答より、小学生は「親子で過ごす」、中学生は「家でのおんびり過ごす」が多かった。

手伝いについては、「よくする」と「少しする」を合わせると、小学生が8割半ば、中学生は8割であった。中学生は「よくする」が年々増加傾向であったが令和5年度で減少している。また小学生、中学生ともに「ほとんどしていない」が増加している。小学生、中学生ともに「食事の用意や片付け」が最も多かった。

(3) 新型コロナウイルスの影響

小学生、中学生ともに全てに影響があったという回答が多くあった。小学生は「給食の中止・制限」、中学生では「学校行事の中止」が最も多かった。小学生は「家族との時間」、中学生は「趣味の時間」に良い影響があったと回答している。しかし、小学生、中学生ともに「健康状態」には悪い影響があったと回答している。

保護者は小学生、中学生ともに「学校行事の中止」に影響があったとの回答があり小学生の保護者では8割半ば、中学生の保護者では8割強であった。また新型コロナウイルスが現在の児童・生徒にどのような影響があるかについては、小学生、中学生ともに「家族との時間」が多く、児童・生徒とほぼ同じ結果となった。

全体としては、起床時間が早くなっている傾向にあり、朝食については、8割以上の児童・生徒が食べている。今後も、早寝・早起き・朝ごはんを意識した生活習慣に取り組み、子どもたちの健やかな成長のために生活環境を整えていくことが大切である。

家庭での過ごし方については、テレビ、ゲーム等、家の中での遊びが上位を占めている。スマートフォンや、パソコン等は便利なツールではあるが、友だちと遊んだり、会話したりする時間も大切にさせたい。学校においては、大人や友だちとのコミュニケーション能力を高めるための支援を引き続き行っていきたい。

新型コロナウイルスの影響により変化した学校行事等は、ほぼ日常の生活に戻りつつあるが、児童・生徒の様子を良く確認し学校行事等を精選する必要があると考えられる。

2 家庭での教育と親子関係について

(1) 家庭での教育

子どもに対して気をつけていることは、「毎日朝食をとらせる」「近所へのあいさつをさせる」「行ってきます・ただいまを言わせる」「友達と悪い遊びをさせない」「大人に対する口のきき方や態度をしつける」が小学生、中学生の保護者ともに8割以上で高い割合となっている。また「子どもの健康」「親子での対話」「温かい雰囲気づくり」「子どもの個性の尊重」を重視している家庭が多いことがわかった。

(2) 価値観

「染髪・ピアス・化粧」をすることについて、「高校生でしてもいい」という回答が最多の割合だった。過去と比べると小学生、中学生の保護者ともにしてもいいと思う時期は「大人」「そうすべきではない」の回答の割合が減少傾向にある。「染髪・ピアス・化粧」を許容する年代が低くなってきているということがわかる。時代に伴う価値観の変化が感じられる。

(3) 家庭での会話

学校でのできごとを「よく話す」「ときどき話す」の割合は小学生、中学生ともに9割を越えていて非常に高い。「学校のこと」や「友達のこと」を話すことが多いという結果だった。「家の人は自分の話を真剣に聞く」という項目は過去最高の割合だったことから、親子のコミュニケーションは取ることができていると考えられる。

小学生、中学生の保護者ともに「子ども中心の生活を送っている」と回答する割合は、これまでの調査の中で一番高い割合の6割半ばだった。また「家の人自分理解している」「家の人自分かまってくれる」「自分は家の人を尊敬している」の項目が過去の調査と比べて最高の割合であった。「子育ては楽しいと感じる」と答えた割合も6割半ば～7割弱で調査が始まって以来過去最高の値であった。以上のことから「子育てへの意識の高まり」が感じられる。一方「最近子どもが自分のいうことをきかなくなってきた」という割合も6割を超える高い値であった。「子どもについて悩みがあるか」の項目では6割弱が、「悩みがある」と回答している。「躾や教育への自信」の項目では、「自信がある」の回答は1割半ばと少なかった。教育への意識は高まってきているものの、悩みや不安、自信のなさが見られる結果となった。

基本的な生活習慣を「おもに家庭で身につけるのがよい」と考える家庭が小学生の保護者9割弱、中学生の保護者9割強と高い割合だった。一方、「基礎的な学力」や「集団生活のルール」は、小学生、中学生の保護者ともに9割半ばの割合で「学校で身につけるのがよい」と考えている。「学校と地域が一緒になって子どもたち育てる」という考えをよいことだと考えている保護者は小学生、中学生の保護者ともに9割半ばで、これまでの調査でも常に高い割合である。調査の結果から「家庭での教育」「学校での教育」「地域での教育」が相互に連携を図り、高め合っていくことが重要だと考えられる。

3 子どもの学校生活と保護者の教育に関する考え方について

（1）学校での学習と教師への要望

教科に関する調査において、好きな教科の上位は、小学生では図画工作、体育、理科である。中学生では保健体育、学級活動、社会である。「好き」が増加傾向にある教科は、小学生では、国語、学級活動、中学生では保健体育、社会、学級活動である。小学生に比べ、中学生は「どちらともいえない」に多く回答している。

教師への要望については、小学生では、「勉強をおもしろく教えてほしい」が最も高く、中学生では、「勉強をわかりやすく教える」が最も高い。「やめてほしいこと」で最も高いのは、小学生では「宿題をたくさん出す」であり、中学生では「わかりにくい授業をする」である。「してほしいこと」、「やめてほしいこと」とともに、小学生は「特にない」が増加している一方で、中学生ではどちらも「特にない」は減少している。

（2）家庭学習と通塾

家庭学習については、小学生、中学生ともに、「学校の宿題」の割合が最も高く、小学生が9割弱、中学生が8割強の結果になった。続いて、小学生では「テスト勉強」「調べ学習」「授業の予習・復習」、中学生では、「テスト勉強」「学習塾の勉強」「授業の予習・復習」となっている。

通塾については、小学生と中学生の回答に差が見られる。小学生の「成績をあげたいから」という希望に対して、保護者は「子どもが希望するから」通塾させていると

いう相関関係が見られる。中学生とその保護者はともに、「成績をあげたいから」という回答が最も高い数値を示している。

(3) いじめとストレスと学校への適応

いじめについて、小学生、中学生ともに「暴力をふるう」ことはいじめであるという認識が強く、7割を超えている。また、「動画の拡散」については、小学生では6割弱、中学生では7割半ばの回答となっており、いじめであるという認識に差が生じている。

ストレスについては、小学生では、「よくある」「ときどきある」が全ての項目で増加しており、中学生では、「疲れやすい」「夜眠れない」「おなかが痛くなる」「イライラする」「午前中ぼんやりする」「何もしたくない」「肩がこる」「人や物にあたる」「死にたくなる」の9項目で増加している。

学校への適応について、「学校へ行きたくない」が、小学生、中学生ともに増加し、5割を超えている。学校へ行きたくない理由の上位が、小学生では、「行くのがめんどうなとき」「いやな授業があるとき」、中学生では、「行くのがめんどうなとき」「体の調子が悪いとき」である。

(4) 学校への期待と教育問題に対する考え方

学校教育に対する満足度は、すべての項目で「とても満足」「満足」が増加傾向であり、特に中学生では顕著である。しかしながら、すべての項目で、小学生、中学生ともに「とても満足」の回答は少なく、「どちらでもない」の回答が多いことが課題である。

学校に期待することの中で最も高かったのが「心の豊かさを育てる教育」である。また、小学生、中学生の保護者ともに「実社会への適応力を身につける教育」を望む割合が増加傾向である。

保護者の教育に対する考え方として、小学生、中学生の保護者ともに、「体験学習推進」「登校強要は不要」「学力別の指導」の3つの項目で「とてもそう思う」「そう思う」の回答が多い。

「登校強要は不要」は、小学生、中学生の保護者ともに、増加傾向にあり、半数以上の保護者が「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。

おもに学校で身につけてほしいものとしては、「基礎的な学力」「受験に対応できる学力」「集団生活のルール」「人とのつきあい方」である。

おもに家庭で身につけるのがよいと回答されたのは、「基本的な生活習慣」「自分の身の安全の守り方」である。

(5) 進路に関する考え方の変化

進路指導について、小学生、中学生の保護者ともに、「子どもの学力に応じた指導」を望んでいる。また、「子どもの希望を尊重した指導」が増加傾向にある。「子どもの話をゆっくり聞くこと」は、小学生、中学生の保護者ともに、減少している。「就職に関する詳しい情報の提供」「保護者の話をゆっくり聞くこと」「保護者の希望を尊重した指導」は今回の調査でも低い割合となった。

いじめについては、小学生、中学生ともに「暴力をふるう」ことへのいじめという認識が強い。一方で、「仲間外れにする」「動画の拡散」へのいじめという認識は、小学生と中学生で差が生じており、小学生はこれらのことに対してのいじめであるという認識が低い。

ストレスについては、小学生、中学生ともに「疲れやすい」「朝起きられない」という回答が6割を超えている。特に小学生については、全ての回答項目で「よくある」「ときどきある」が増加している。

「学校に行きたくないと思うことがある」子どもの割合は小学生、中学生ともに5割を超えている。その理由については、「行くのがめんどうなとき」という回答が一番高い数値を示している。

昨今、子どもたちの抱えるストレスが複雑化・多様化していることから、今後も、学校や地域が、子どもたちにとって、安全で楽しく居心地のよい場所になるよう、家庭や地域と連携を深めていくことが大切である。

教師への要望については、本調査の結果を真摯に受け止め、想いや願い、期待に応えていくことが大切である。今回の調査から、保護者の「多くの力を学校で身につけてほしい」という学校への期待が、今後も膨らんでいくことも考えられるが、家庭と学校とが子どもの成長を共に支え、連携を図りながら教育を共に進めていくことが必要であると考えます。

学校では、子ども一人ひとりが、存在感をもち共感的な人間関係を育むために、お互いをおもいやり、相手のよさを見つけることのできる集団作りを目指し、今後も指導の充実を図っていきたい。

4 子どもとスマートフォン・携帯電話について

（１）スマートフォン・携帯電話の所持率とルール

子どものスマートフォン・携帯電話の所持率は、小学校4年生以上で6割以上、中学生では9割以上と高くなり、生活の一部になってきていることがうかがえる。年々、スマートフォン・携帯電話を持っている割合が増加傾向にある。

スマートフォン等の使用についてのルールは、小学生、中学生の保護者ともに7割程度は決めているようだ。小学生、中学生自身は、家庭でのルールが決められていると思っているのは5割半ば～6割弱で、保護者と子ども自身の認識にずれが生じている部分がある。フィルタリング・サービスを利用していると回答した割合は、小学生、中学生の保護者ともに7割程度であった。

（２）スマートフォン・携帯電話による生活への影響

昨今、スマートフォン・携帯電話、ゲームなどの情報通信機器の普及が急速に進み、小学生、中学生ともに、利用時間が増えてきている。特に、LINEやYouTube等の動画視聴が大半を占めている。それに伴い、子どもの生活スタイルや人間関係も変化し、学習や睡眠に費やす時間が減少したり、コミュニケーションが不足して、関係が希薄化したりする。

スマートフォン等の普及により、便利になってきた一方で、子どもたちの生活への弊害も感じられる。

子どものスマートフォン・携帯電話の所持率は、年々高くなっている。

スマートフォン等を持たせていない小学生の保護者は、「まだ早い」という理由が最も多く、「犯罪に巻き込まれる」と続く。中学生の保護者は、「犯罪に巻き込まれる」という理由が最も多く、「生活リズムが崩れる」と続く。持たせていない保護者のうち、子どもにとってスマートフォン等が必要だという回答は3割半ばであったが、持っていない子どもは、7割半ばが「必要である」と回答しており、親と子の感じ方に違いがみられる。

スマートフォン等使用についてのルールは、小学生、中学生の保護者ともに7割程度は決めていると回答している。小学生は6割弱、中学生は5割程度が決めていると回答しており、保護者はルールを決めていると思っているが子どもはそう思っていないというように、親と子で感じ方に違いが見られる。

また、フィルタリング・サービスを利用している割合は、小学生、中学生ともに7割であったが、どちらも決して高い割合とは言えない。スマートフォン等によるトラブルに巻き込まれないよう、利用の際は、子どもの発達段階に応じたルールを決めて利用することが大切である。

スマートフォン等の利用時間については、4時間以上が小学生で2割程度、中学生で3割となっており増加傾向である。今後も、あやせ夜間ゼロ運動～ケータイ・スマホ、ゲーム機等の夜間ゼロ運動～の取組の普及を進め、家庭と学校が連携して、子どもたちが、心身ともに豊かに成長できるよう、環境を整えていきたい。